

尾瀬

第12号

尾瀬の自然を守る会



卷頭言

「花の尾瀬を歩こう」なるバスハイク会員募集のポスターが駅の壁で目につき、今年も尾瀬に受難な季節がやってきた。何故公園の利用が受難とされるのであろうか。それは、尾瀬が特別の処とされているからであろう。その特別の処へと一時に多数の人々が押しかける。その事によって生じる不都合。それが尾瀬にとっては受難なのだ。しかしながら、本音を吐けば尾瀬も普通の公園として、気楽に歩るける処でありたい。

ところで、この季節になると街や職場や学園では、海山のことが何かの折に話題となる。その中には当然尾瀬も入っている。そして、ほとんどの人々は尾瀬のことを異口同音に、「いい処だそうで」「一度は行ってみたい」と言う。この人達の街での生活は、というと、今ではもうすでにあたりまえになってしまった、タバコ、コーラの空缶の投げ捨てを平然としている人々だろう。しかし、不思議なことに、尾瀬に潜み入ればゴミを持ち帰るので

ある。

年間50万人を越す入山者、尾瀬に居る時は立派なナチュラリストなのに街へ戻れば「タダの人」になってしまう。日常生活と尾瀬とは、そんなに疎遠なものなのだろうか。尾瀬も普通の公園として……、というつは、尾瀬だからと言ってピリピリ神経を使うのではなく、日常生活の延長としてゴミを投げ捨てずに楽しみたい、と言う次第なのである。

尾瀬に関し、事これ以上悪化すれば「罪を憎んで人を憎まず」などという氣の長いことを言ってはいられなくなるのでは…。過失を責むるは寛大なるも、故意の類はいかに微小なるに到るまでも厳しく明確に処すべき時なのではないだろうか。

いずれにしても大切な、そして後生末長く残したい尾瀬である。その第一歩は尾瀬の保存に汗を流すことではなく、日常生活を大切にすることではなかろうか。 岸 好人

昭和52年度『尾瀬の自然を守る会』総会報告

去る5月29日、日より、薄雲りの東京の空の下、代々木のオリンピック記念青少年総合センターにおいて、昭和52年度の総会及び「尾瀬の自然を考える夕べ」が開催されました。海へ山への絶好の行楽シーズンと重ってしまったためか、参加者の集りはあまりよくはなかったようでした。

第一部総会、第二部「夕べ（後述参照）」と開催してゆきましたが、それでも第二部の「夕べ」では尾瀬における「水質汚染」に関するかなり詳しい講演がおこなわれ、一応の成果が得られたようです。

さて総会の方は、前年度代表の岸好人氏の前年度活動報告があり、続いて同じく前年度会計の武繁春氏よりの合計報告を承認し、今年度役員として代表：岸好人、会計：武繁春

の両氏が再選されました。また、会計監査役としても、松田美代子・渡辺貞之助両氏が留任と決定されました。

このあと、岸好人新代表から、「今のところ尾瀬では主だった動きはないが、今後とも行政側の動向を注意深く監視をしていくと同時に、我々市民サイドからも積極的に『尾瀬自然保護計画案』を提起してゆきたい」との今年度の活動計画の表明が行われました。

続いて、会事務局の林哲也氏より緊急発言として、5月上旬の読売及び産経新聞に掲載された「尾瀬入山料」についての説明がありました。このことについては、いずれ本誌上で詳しく取り扱いたいと思います。

編集部記者の記

『尾瀬の自然を守る会』会計報告 昭和51年4月1日～昭和52年3月21日

収 入		支 出	
前 年 度 繰 越 金	238,631 円	通 信 費	63,800 円
会 費	115,000	印 刷 費	76,000
カ ン パ	154,837	交 通 費	19,600
銀 行 利 息	1,806	使 用 料	25,000
		消 耗 品 代	4,060
		連 合 大 会 参 加 費	3,000
		連 合 加 盟 費	22,500
		資 料 費	2,480
		雑 費	3,970
合 計	510,274	合 計	220,410
		次 年 度 繰 越 金	289,864

尾瀬の自然を守る会会計 武繁春

上記の通り、相違ありません。

昭和52年5月20日

会計監査役 松田美代子 印

昭和51年度会計は、上記の通り決算され、5月29日の席上において承認されました。

次年度への繰越金は、前年度より若干増てはいますが、激動の時と思われる今年度は、

諸々様々な出費がかさむと考えられます。諸会員方にあっては、尾瀬を愛する人を一人でも多く「尾瀬の自然を守る会」に勧誘して、

私達の声を大きくし、豊かな財源でもって円滑なる活動ができるよう、努力していくではありませんか。

タベ 報告

去る5月29日、総会を兼ねて尾瀬のタベ『尾瀬の自然を考える』と題して代々木のオリンピック記念青少年総会センターにて行なわれました。参加者は、連絡が多くの人には届いてない為と日曜の昼間という事もあって50数名でした。この席上で今年度の会代表としては、岸好人氏、会計に武繁春氏、会計監査役に松田美代子氏、渡辺貞之助氏が選ばれました。前年度と同じ役員ですが、前年度より一步前進した活動を、そして尾瀬を美しいままに保護して人為的破壊の加えられないよう監視しましょう！

今年度の活動の中に「入山料問題」があるが、最近マスコミでさわがれているものです。この問題について当会のメンバーが現地に出向き、出先の出張所より聞いてきたところによると、もし入山料をとるなら、1,200円以上とらなければ入権上をまかぬ事ができないという。又雪融けの季節になると倒木が目立ち、これを始末するだけに、人が足らなくて右往左往している状況であるという。ま

さに中央官庁は現地を知らないの一言である。そして中央の意見を通すなら（入山料を取る為には）入山者を今以上にふやさなければならないという逆効果。いったい環境庁は何を考えているのでしょうか？

今年度の活動方針の中でこの事は特に耳に残りました。この後「オゼにおける水質汚染」と題して、栗田秀男氏、峰村宏氏の講演、カラースライド上映「オゼの自然」がありました。尾瀬の自然を見て始めてオゼの草花の美しさにみせられた高校生は、今年の夏はバイトして金をため、絶対にオゼに行くのだ！といきまいしております。

今回のオゼのタベの反省としては、タベが行なわれる事を多くの人達が知らなかった為と、オゼについての多くの問題の熱がさめたと多くの人が思っている為と思われます。次回には、多くの人を集め、オゼに関する多くの問題を認識してもらいたい、これからオゼを保護していく一員になってもらうようなタベを……！

八木 記

『尾瀬の水質汚染』

＝尾瀬の自然を考えるタベ講演要旨＝

講師

群馬県立渋川高校教諭

栗田秀男氏

群馬県立利根農林高校教諭

峰村 宏氏

前書き：

特別保護地区という、最も厳しい規制によって護られているはずの尾瀬にも、様々な問題が山積みされています。その中の1つに、生物のいる所、必ず生じてくるものに汚水があります。シーズン中には尾瀬の各所に計測

千人という人々が泊ります。また、泊らないにしても何万人、いや何十万人という人々が尾瀬を訪れます。今、単純な計算をしてみましょう。人一人の放尿量、仮に300ccとし、日に3回放尿するとし、年間の尾瀬への来訪者を50万人とすると、一体どのくらいの尿

が尾瀬へ供給されることになるのでしょうか。しかも、この尿はほぼ一ヶ所、便所という低くき所、あるいは木道、林道沿いという限られた所へと供給されています。

その他にも、フロ、合成化学物質を多量に含んだ歯みがきの水、食器洗いの洗剤、溪流で洗う汗をふいたタオル、等々と汚染源は数限りなくあります。そして、これらがすべて尾瀬にとっての汚染物であると言われます。しかし、ちょっと考えて下さい。非常におもしろし、しかし不可解な事柄が自然保護団体の中では、何の疑問も抱かれずにまかり通つ

要旨：

本日の主題は「尾瀬における水質汚染」ということであるが、まずははじめに、尾瀬における環境汚染にはどのようなものがあるか、というと、大別して「水質汚染」と「土壌汚染」がある（「大気汚染」は尾瀬ではそう問題にはなっていないようである）。そして、これら両者ともその汚染源は人間の排出物ということになる。うち、本日は主として尾瀬沼における「水質汚染」及び、そのことを通じて考えられる、あるいは起っている動植物への影響を観てゆきたい。

尾瀬における「水質汚染」を考える前に、まず尾瀬の特質を思い起してみたい。周知のように、尾瀬は日本のほぼ中央に位置し、周囲を約2,000mの山々で囲まれた盆地状の地形し、寒冷な気候と、日本でも有数を多雨多雪地帯であるという特徴をもっている。したがって動植物枯死体は分解が進まず、泥炭となって湖岸・森林・湿原上に多年に渡り堆積し、特に湿原上ではその堆積物ばミズゴケであるため、その堆積に際し多量の酸性物質が生じる。したがって尾瀬周辺の停滞水（？）は、そのほとんどがPR 4.4～4.5程度の酸性を、つまり、腐殖酸性水域とみなすことができる。酸性でしかも寒冷のため分解が遅いということから、栄養分に乏しい、つまり貧栄養の状態になっている。そして、貧栄養は

ています。それは「タヌキのクソは有機物、ヒトの大キジ（クソのこと）は汚物」という考え方です。一理はあります。ひとつ、初夏の夜短か、むし暑くて眠られぬ夜をお過しのあなた、つらつらとじっくりお考え下さい。

前おきが長くなりました、それでは、5月29日に行われました貴重なる講演、両氏が長年にわたり足でかけられた価値あるデータを用いての尾瀬の水質汚染の現状を訴えた講演の要旨を以下に記します。尙文中用いました表、グラフ類は、文責者が両氏の許可を得て、当日の講演資料集より転写したものです。

貧栄養なりの動植物相をもっている。逆に見れば、この特殊な動植物相が維持されていれば、尾瀬は汚染されてはいないとみなすことができる。

さて、尾瀬沼についてその水質問題を考えてみよう。まず言えることは、少々不思議に思われるかも知れないが、尾瀬沼は今から約10万年前のひうち岳の噴火によって生じたせき止め湖、純然たる天然の産物であるが、その水位変化・水の流れ、という観点からみると「人造湖」としての性格をもっている。毎年定期的及び不定期的に水位が変化し、しかも、その水位変化に伴なう湖水の流れは一定している。図1は尾瀬沼における汚染源の流入径路（太矢印）と、湖の移動方向（点線矢印）を示してある。汚染源の流入地点とは人の多く集まる処を指している。そして本来な



表1
年 透明度

1905年	4.0m	1966	4.7
1915	6.5	1971	4.8
1926	6.0	1972	
1932	3.7	7月	5.8
1950	4.5	8月	4.5
1965	6.5	10月	4.0

らば、この沼の水は沼尻より沼尻川を通って尾瀬ヶ原へと流出しているのであるが、三平下に取水口をつくり、隧道をくぐって沼尻とは反対川の片品川側へ水を落しているために、湖水の動きに変化があらわれてきた。それが図中点矢印のような流れである。したがって、取水の盛んな時には、大江川湿原から三平下にかけての沼東岸の沖合が最も汚染の激しい処といえる。

ところで、湖沼の研究調査の項目の一つに透明度というものがある。表1は尾瀬沼における透明度の変化を表わしたものであるが、透明度をもってただちに汚染の有無を断じることはできない。というのは、同一地点で測定しても季節・測定日以前の気候等によって測定値がかなり違ってくるからである。これは、透明度はその湖沼に生息する植物プランクトンの量によって大きく変化するからである。

尾瀬沼の無機・有機環境に関しては、講演者等をはじめとして、いく人かの人々が調査したデーターがいくつかあるが、先にも記したように、尾瀬沼の水は人造湖的要素をもって移動しているため、何分にもデーター不足の難が免れない。というのは図1の点線矢印のように、汚染水が常に一定方向のみに流れていれば調査はもっと楽に行えるのであるが、取水が少ない時には、汚水は図1の波線矢印のように湖心方に向って流れる。しかも、汚染水の流入口は主として図中の3点に限られている、部分的汚染となっている。したがっ

て頻繁に調査を重ねていかないと、その実体がわからない、というのが現状である。しかしながら、湖心部から得られたデーターを見る限りにおいては、尾瀬沼はまだまだきれいであると言える。

しかし、これを生物指標であるプランクトンという面から観ると、そうそうきれいであるとは言えないようである。本来貧栄養型湖沼であるはずの尾瀬沼であるが、生息するプランクトンの種類数から判断するに、中栄養から富栄養型のプランクトン組成と言える。ただしこれも測定地点、測定季節によって多少のズレが生じ、ここでも部分汚染というやっかいな壁にぶつかる。

一方、底生動物から尾瀬沼を観ると、汚水流入口である3ヶ所に関しては大部底部汚染が進んでいると言える。富栄養の指標動物になる底生動物のイトミミズ類、ユスリカ類(アカムシ)が、この3ヶ所からかなり多量に発見された。

次に、これら汚染水の原因となっているものと何かと言うと、台所排水、フロの水、便所等々といろいろあるが、その中の一つ、便所について見てみよう。尾瀬地区内ではほとんどの小屋が水洗式便所にしたわけであるが、この水洗式というのは、浄化槽を地中に埋めその槽内で有機物を完全に分解しようというものである。ところが、結論から言うと、こ



れらの浄化槽何らの役に立っていない、ということができる。これは、低温であるという、尾瀬にとって必須事項であった条件が逆に枷となって、分解を抑えてしまっているためである。また、この浄化槽調査データーも季節(気温)によって大きく左右されるため、

一回きりの調査で即断を下すのもよくない。

以上両講師の調査をもとにした講演であったが、最後に、尾瀬の「水質汚染」なる問題に結論を下するのは早計のようである。確かに尾瀬ヶ原では小屋からの排水路際のアシやおわりに：

調査研究というのは大変なことです。たった1枚のグラフを描くのにも何人もの人々が何年あるいは何十年という歳月を費しているのです。尾瀬という未開（調査研究の対象として未開ということ）の地では、その困難はなおさらのことです。すべての人々から快よく協力が得られるとは限りません。時には防害もあったことでしょう。しかし、たとえ少

リュウキンカが異常発育し巨大なものも見られるという事実もあるが、汚染のその実態といふものは絶対的なるデーター不足によって、ほとんど解明されてはいない。今後、国なり県による体系的なる調査を切に望みたい。

いながらもここで得られたデーターは後年きっと尾瀬の自然保護にとっての大きな味方となるはずです。物事を客観的に捉えていくという科学的态度（それは何も数字万能を指している訳ではありません）こそが、いまの我々に課せられたものではないでしょうか。何事につけても……盲目的な偏狭は絶対的によい結果をもたらしません。文責 河内輝明

昭和52年度第一回尾瀬自然観察会報告

去る4月29日～5月1日にかけて、残雪残る尾瀬での自然観察会が行われました。参加者は9名+1名、+1名というのは、29日午後3時頃、一行が上越線沼田駅へ降り立つと、フット見知らぬ人が一人、いかにもこれから山へ登るといういでたちで立っていました。「これから尾瀬へ?」「ええ…」「でも今からでは無理でしょう」「はあ…」「もしよろしかったら、私たちと御一緒に…」「はあ、ではそうしましょう」という具合で、現地参加1名を含め計10名の圧倒的多数(?)の参加者をもって敢行されました。

コースは、戸倉一泊、翌日鳩待峠から至仏山登山、ハア、全員バテバテ気味で何とか頂上直下、ここで叫び続ける腹をおさえて、いざ山頂へ。ただ、耳学問によれば、去年の冬は雪が多いとのことでしたが、以外と雪が少ない。例年であれば全山真白という具合であろうが、今年に限り至る処そのやわ肌を見せてはいる仕末、皆若干の疑問を抱く。それでも、小至仏付近のダケカンバ、コメツガに着いた霧氷は見事、思わず見とれてしまいました。

至仏山からの下山、この少残雪ではグリセード（登山グッを使ってのスキー）はできな

いのでは、と少々不満を持っておりましたが、ちにはからんや、天ヶ原（至仏山東方直下の台地）以下には適度の残雪があり、標高差約千㍍の好斜面、勢い余って一気にすべり（転り）降る人も出る仕末、まずは絶好の春山気分といったところでした。

山の鼻着、そり午後2時、ここで一寸（実は一寸でもないのですが）休憩をとり、いざ今日の宿泊地見晴へ。しかし、融雪が早いせいでしょう、何せ歩きにくい湿原、一步足を出す度に内服がジーン（雪上歩行した人はわかるでしょう、特にゆるい雪の時は、内服、しかもつけ根あたりが痛くて痛くて）、誠に疲れる平地徒歩でした。しかも、至る処穴だらけ、つまり、融雪で湿原表面がめちこちに露れているのです。尾瀬ヶ原名物の木道も役立たず。もう雪融け水で浮いてしまい、ひざあたりまで全員ぐっしょり。でも中には要領のいい人が……。まあいずれにしても、大半の人(?)が下半身ずぶぬれて、命に別なく無事見晴着、午後はそう、5時をまわっていました。入った小屋では、尾瀬の自然保護を考えている人の来訪とあって、手厚い歓迎を受け、皆満足。

晴晴附記 部屋は、未だ入山者も少ないせいもあって2つもらいましたが、さて問題は8畳8畳の2部屋にどのように人員配分するか、しかし、さすが女性は強い、10名中3名しかいないにもかかわらず、それまで元気にして率先してトランプ遊びに興じていたものを、「さてそろそろ寝るか」の一老トルの言葉を聞いて、持っていたカードをほうり投げ、いそいそと別室（もう一つの8畳間）へと御移り召され、我々男組が行った時には、3組のフトンを処狭しと敷き、しかも、今まで聞いた事もないようなイビキをかいしているではありませんか。「タヌキ！」と思いつつも仕方なく7名そろって他8畳へ、チクショウ、女って得だね。…余談。

さて話変わって翌朝、女性軍3名とも赤いお目々をして、「おはよう」、例によって質素な朝食をすまし、「さあこれからどうする」。予定ではおとなしく沼へ出て、三平峰を一気にかけ下りなつかしい東京へ、というはずのところ、小屋の御主人に、「夏にや容易に行ん処へ行け」と勧告され、急拵コース変更。全員見晴一皿伏一治右衛門池一小沼一沼尻ルートをとりました。ところが、バカリーダーのドジのため、皿伏のつもりで登った山が、その1つ手前の名もない山、皆ブンブン。でも、ケガの功名か、治右衛門池目差して最短コースわとったところ、絶好の急斜面があらわれました。ここでサンサンたる春の陽の下のお弁当、いやあ汗を流したあとにぎり飯程うまいものはありません。

雪合戦などの戯れの後治右衛門一小沼一沼尻と道に何ら迷うことなく無事行き着いた訳ですが、ここで一つ、多分このシーズンでなければ発見できなかったと思いますが、位置から言うと、皿伏山東北方直下の斜面で、ある発見をしました。その理由については詳しくは知らないので、ここで独断的な決定はできませんが、その斜面は日光国立公園尾瀬地域、特別保護地区ですが、何と伐採跡を発見

しました。付近の小屋をたてるためか、山火事の事後処理か、いずれにしてもかなり広範な面積にわたり切り株が見い出されました。山をまちがえたおかげでいい物を見せてもらいました。

そして、午後1時半、沼尻着。皆様おそろいで山を降るかと思っていたら、下山組は筆者他1名の計2名。残りは休暇をとったとか何とかやらで残留希望、本人も居残りたい気持を胸に秘め、2人さびしく解散後下山致しました。

ただ、残留組に後に聞いたところでは翌日（5月2日）はひどいドシャブリ、残った意味がないとか。前日の天気がウソのようとか。ケケ、ザマミロ！

それでも、勇敢なる一部の人々は沼山峠往復をしたとか（でも、あまり自慢にはならないね）。

尚、今山行の目的の1つ、水採取は、やはり専門メンバーを組まないとどうしても時間的、コース的制約を受けてどうしようもなく、結局初期目的は達成せられませんでした。

付言教訓

1. 雪の残っている山へ行く時は、サングラスと、日焼け止めクリームを持って行くこと。
2. ハナ紙はなるべくやわらかいものを持って行くこと。参加者の中には、硬い紙を使ったために、ハナの下が真赤になり、その後、2週間もマスクがはずせなかつたという人もいました。

付言事後承諾

記述中会話部分に一部フィクションのあることをおわび致します。

PRODUCED BY JUN

旅に見る自然の景観 PART 3

渡辺貞之助

=シャトー・レイク・ルイーズ=

バンフからシャトー・レイク・ルイーズへ移る。このホテルの窓からの景色は、おそらく世界で一、二と言ってよからう。バンフのスプリング=ホテル、ジャスパーのジャスパー=パーク=ロッジの比ではない。

レイク=ルイーズの岸からそり立つ左右の岩山は半ば雪を抱き、正面には万年雪に被われた大氷河が、しかも新雪に輝いている。

夕刻、湖尻まで散策して帰ると、ホテルの背後の山から満月が昇ってきた。山中の湖岸に独り佇めば、詩情も湧こうといふものである。

翌日9月9日は、筆者にとって古稀の誕生日に当る。朝から一点の雲もなく、終日快晴であった。カナディアン=ロッキーのこの一日は至福の日と言ってよからう。

バンフIC戻り、市内民宿IC宿をとる。玄関から花が満ち、庭先には野鳥が群れ、餌をついたばかりである。この静かな宿を中心に、ボーカ川辺のそぞろ歩きや、サルファー山ヘロープニウェーで登り展望台に憩いて、楽しむ。

=バンクーバーとビクトリア=

バンクーバーを経由し、船でビクトリアへと渡る。州会議事堂も州政府も、その隣りの蔦に被われたエンブレム=ホテルも、皆芝生と草花でいっぱいである。街灯の柱にも花かごが吊され、まるでお伽の国に遊ぶ想いである。

その夜はバンクーバーへ帰り、銅葺きの屋根が緑青色に輝く格調高いバンクーバー=ホテルに泊る。

この街も美しい。これ程自然に恵まれた都市も少いのではなかろうか。広大なスタンレー公園や、市民が世界一美しいと自慢するクイーン=エリザベス公園、その片隣りはそのまま自然林へとつながり、反対側はブリティ

シュ=コロンビア大学のキャンパスへと続いている。そして、大学の校舎がその中に点在する様は、絵のようである。

=ジャスパー=

再びロッキー山中へ戻る。今度はジャスパーIC宿をとる。バンフと較べると、バンフの方が山にも近く、川もあり、町全体の感じもよく、観光ルートもバンフの方が優っているようである。しかし、一つだけ、メリーン=レイクだけは見落す訳にはいかない。

メリーン=レイクは奥が深い。船に乗って二時間もいくと、両岸の山が迫り、山嶺には雪、中腹には紅葉、ここでも形容のしようのない景観の連続である。ロッキー山中の珠玉と言うにふさわしい。

帰路は鉄道にしようと思ってみたが、ここでは一日一便の故、まことに仕合が悪く、仕方なくバスで下る。沿々と続く道路、あたりはもうすでに薄暗くなり始めている。道の両側、河に沿って長く白樺の林が続く。その白樺は、すべてみごとに黄葉している。時々忽然と雪の山嶺が顔をのぞかせる。ロッキーへの道は、ジャスパーからのものでも、バンフからのものでも、その沿道は変化に富みあきることがない。

=自然の尊重=

豊かな、あまりにも豊か過る程の自然に恵まれているカナダ。しかし、その豊かさを大事にしている、ということも見落してはならない。都市においても自然を生かし、ロッキー山中でもその自然が損われないよう、周到な配慮がなされている。山の湖岸にホテルがあっても一軒だけ、林中にロッジがあっても目立たぬように建られている。それと較べると日本のそれは狂氣の沙汰と言わねばならない。おわり：「旅に見る自然の景観」は今回をもって終ります。

ここまで来たか環境庁のムチャクチャ行政

役人集団、中央最優先の環境庁では、昨年の秋以来「尾瀬入山料構想」などを醸造しつつある。もっとも当の環境庁に言わせれば、「入山料」とは言わないそうだ。「受益者負担金」と言うと、長イスにふんぞと返りながら、いかにも他人を小バカにしたように、とある片書き付き環境庁役人が言っていた。

ま、どちらにしても東大出の多い上級公務員集団も、とうとう7年の潜伏期間が過ぎ、

＝入山料だけで自然守れぬ＝

来年度から国立公園で“入山料”を徴収する計画がすんでいるそうである。アメリカなどでは、すでに入山料（入場料）が実施されているが、わが国の場合、はたして妥当であろうか。「尾瀬の自然を守る会」の一員として、はなはだ疑問を感じ、とくに時期的な点に問題があると思う。

入山料のねらいは（1）自然公園の管理費を入山者にも負担させる（2）過剰利用の防止にあるという。

管理費の入山者負担というのは、利用者または受益者負担の精神を適応したのであろうが、ちょっと考えていただきたい。例えば、国の予算が今まで十分に投下されていたのなら、破壊されず、または自然崩壊せずにすんだ所もありうし、また、南アルプス「スーパー林道」のように、これから多額の補修費を必要とするものを作った行政の責任ということも考えなければならないと思う。

＝自然を金で買う危険を考え方＝

さらに言わせていただくなら、本当の意味での自然保護ならば、山岳道路の未着工部分や毎年凍結して不通となる場所などは廃道にすべきなのである。そうでないと“足”は確保しているものの、入山しては困るといった矛盾が、全国で起こるだろう。

次の過剰利用の防止については、まず山岳道路の建設をやめなければならない。道路が

集団発狂し、ついにはこのようないきつき施策を言い出してきたかと思うと、背筋がゾッと寒くなる。

そこで本会でもこの件に関し林哲也専門委員を挙出し、秘かに調査を進めてきたが、以下に、同氏が昭和52年5月22日付の読売新聞に寄稿した本件に関する当会の見解を記す。

あれば、人が集るのは当然である。自然を美しく保つという根本的な思想から離れ、景観と自然の恵みをカネで買うという“急陥な考え方”に傾きかねないので、山を切り開いた道路づくりは、絶対にさけなければならない。

そこで過剰利用の防止策だが、従来、各自治体で行っているマイカー規制などのようによれるいものでなく、もっと思いきった対策を打たなければならない。

＝「もう定員です」ができるか＝

観光業者の募るバスでの入山を考えてみるとよい。バスを連ねての入山は、もっと多くの人を運ぶ手段の一つである。尾瀬の場合、とくに夜行バスが、地元の住民に大きな迷惑をかけている。国鉄の急行列車「尾瀬号」も、過剰利用に加担している。多い時には三本の夜行列車が走る。

入山料が実施された場合、これらバスや列車を利用した多くの利用者は、もちろん入山料を払うだろう。払ったら入山できるとすれば、何のための過剰防策になるのであろうか。尾瀬に限らず、入山口まで「もう定員です」と、登山者を帰すことが、はたしてできるだろうか。

かといって、予約や抽選制をとった場合、公平が保てるかどうか、大いに疑問が残る。入山料で過剰防止をはかることはむずかしい。

さて入山料で国立公園の管理費の一部をまかなうことには、否定する理由は見当らない。

ただ、金持ちほど自然が楽しめるといった安易な徴収方法は困るのだ。そこで今の状態での徴収法を提案したい。

それは、入山口で駐車料金を取ることだ。マイカー、バスについては、人数によって別の料金が必要だろうが、入山する人数と駐車時間の併用制にしたらいい。ただし、管理費が高くつけばつくほど、入山料（入山人口）をふやさなければならなくなるという悪循環の心配は残る。

スイスのツェルマットでは、一般の車を入れないそうだ。ツェルマットから上は、登山電車しか走らない。こうしたやり方が日本でも通用するかどうかは別である。

二貫した自然保護行政こそ＝

しかも、内閣が変るたびに、道路着工の“

凍結”が解除されたり、特別保護地区に平気で道路（例えば、日光バイパス）を通すようなことを、自然保護の環境庁がやるのだから、今度の入山料も、単なる思いつきのような気がする。入山料は、ただカネを払うという問題ではない。環境庁や関係当局が一貫した自然保護行政を行うかどうかの問題である。

むしろ尾瀬についていえば、ツェルマットのように、山間最奥地である戸倉、檜枝岐に「尾瀬自然博物館」のような自然保護・教育施設を作り、そのあとで入山料を徴収するような施策を実行してほしい。

今の状態での入山料徴収は、わずかな管理費と引き換えに、今までより以上の自然破壊を招くようなことになりかねない、と思うのである。

林 哲也

どうでもいいことを氣のむくままに PART 1

また今年も「全国自然保護大会」の季節がやって来た。今年は東京ということで、かなり多数の参加者があるのではないか、と当局者達はみているようである。大会と名のつくるものを開くのであるから、少ししか集まらないというのよりは、圧倒的多数の参加、となつた方がいいに越したことはないだろう。

しかし、ちょっと気になることがある。何か聞くところによれば、先人達が苦労してつくり上げたこの「連合」を、解体せんと秘かに（？）ねらっている「小児病患者」がいるとか。私思うに、この人々はきっと、口では解体などと言ってはいるものの、いざ実際に解体などしてしまったら、ただただオロオロするばかりではないだろうか…。本当は解体などさせたくないのではないだろうか…。

別の見方をすると、大人気ない、ということになるのだろう。と言うのも、逆に開き直って、彼らは一体「連合」に何を期待し、そし、そして、どのように運営してゆこうという展望を持っているのだろう。真意の程がわからないので、あくまでも推測の域を脱し得

まいが、考えられ得る範囲内で知的な遊びを楽しんでみよう。

ことによつたら彼らは、極めて思慮深い兼格家達なのかも知れない、この倦怠感うず巻く自然保護運動の現状を見るに見かねて一計を案じているのかも…。今を盛りのNHKの大河ドラマ「花神」中の大村益次郎なる御人の口を借りて語らえば「このくさりきった日本、何としなければ…、手術が必要だ、しかも大手術が…、それには、得体の知れぬ、世界にも類を見ない天朝なるものを崇め奉り、幕府を賊軍として、日本國の意を倒幕へと決しさせなければならない…。」ということなのであるかも。もしそうであるとしたならば、私も大賛成をするところである。

以下次号…。



盛夏の『尾瀬自然観察会』へのお誘い

まぶしい午後の陽光の中で、わたしはいつか行った高原のことを思い出していた。遠くにかすむ山を背景にどこまでも続く草原、その草原に処狭しと咲きほころぶ橙色の花。じっとその花を見つめ、そっとその間に手を触れた時、あの人は「これがニッコウキスゲさ」と教えてくれた。そして、この花の物語りを聞いた時、思わず涙があふれてくれました。「ヘメロカリス」……はない命、朝に開き、夕べにはもう閉じてしまう短い命。たった半日の盛装のために、半年もの長き時をじっと雪の下で耐え忍んできたニッコウキスゲ。その花を見つめる彼の眼は、その花のあでやかさとは裏腹に、その悲しい運命を思って暗く沈んでいました。

もう一度行こう。そして、あの悲しい花とお話をしよう。わたしの命も短かかったのだから……。でも、もしかするとまた彼と…

きらびやかのあの暗い、淋しい冬をじっと耐ってきたわたしなのだから、きっと今年こそは……。

記

路 径：7月17日（日）朝、トマトジュースを飲みほし、さあ元気に出発。

富士見峠を越え、ヒオウギアヤメの咲くアヤメ平から鳩待峠へ（泊）

7月18日（月）高嶺の花咲きほころう至仏山へ……、尾瀬ヶ原を渡り見晴へ（泊）

7月19日（火）沼をまわり、しばし北欧的ムードを楽しみながら……また排気ガスの中へ。

参加希望者は、7月観察会と明記のうえ、下記要領で、下記へ往復ハガキにて7月5日までにお送り下さい。

晩夏の『尾瀬自然観察会』へのいざない

すっかり人通りの絶えた尾瀬ヶ原、どこまでも青く澄みわたる天空、その中にボッカリと浮いた純白の雲を頭に頂いたひうち岳。かすかに色づいた草原を渡る風はもう秋声。7月のあの喧嘩がまるで虚のような見晴・下田代十字路。朝、肌をさす寒気の中へと一步踏み出せば、そこは一面の霧景色。時の移るにしたがい、遠くに望む白樺の幹、早々と色づいたナナカマド。

いつもとちがう尾瀬、
いまだ見得ぬ尾瀬、
せまり来る朝霧の中で、あなたと……
旅立ちの時は、いま……

記

路 程：8月21日（日）夜汽車に飛び乗
り、白虎隊の故郷へ

8月22日（月）寝ぼけ眼でバス
にゆられ、平家の落人部落を通

り、いざ見参。沼山峠より尾瀬沼へ（泊）

8月23日（火）朝もやの中で、
夜明けのコーヒーなどいかが…
透き通る紺碧の中にそびゆるひ
うち岳へ、遠くにかすむ日本海
を望見しつつ見晴へ（泊）

8月24日（水）原に最後の色ど
りをそえるエゾリンドウの可憐
なる姿態に別れをつけつつ、尾
瀬よさらば、また来る日まで…

参加御希望の方は住所・氏名・性別・年令・電話番号・尾瀬へ行った回数を記入のうえ、往復ハガキにて下記あてへ、8月10日までにお送り下さい。8月観察会と明記のこと。

東京都世田谷区下馬3-38-14

〒154 電話 03-422-3466

河内輝明

例

会

毎月第一金曜日に例会を催しております。最新の情報を交換したり、一ヶ月間の活動報告をおこない、その月の行動計画を話し合っております。

- 時間に余裕のある方
- 尾瀬及び全国の自然保護に興味のある方
- 最新の情報をお持ちの方

是非おいでください。

記

時：毎月第一金曜日、夕方6時半より

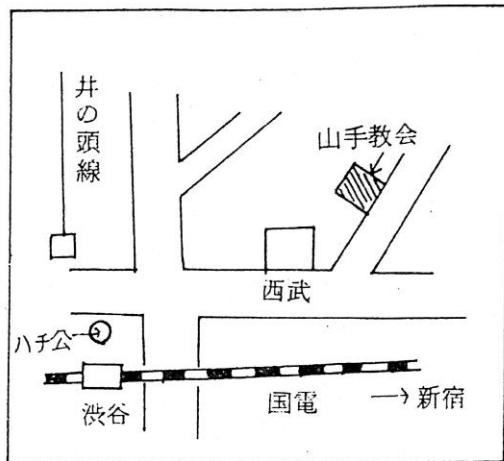
所：東京渋谷山手教会内会議室（右図参照）

お わ び

先日の春の「尾瀬自然観察会」におきましては、機関誌編集部と観察会幹事との間の連絡が不十分であったために、折角山行を予定された方も、応募期日に間に合わず、大変御迷惑をおかけ致しました。謹しんでおわびを申し上げると同事に、今後このようなことがないよう、十分気を付けてゆきたいと思ひます。

御 案 内

去る5月29日に、東京代々木のオリンピック青少年総合センターにおいて行われました「尾瀬の自然を考える夕べ」で使われました「尾瀬における水質汚染」の講演資料集にて、まだ多少残部が御在ます。当日来られなかっ



た方等で御入用の方は、必要部数をお書きの上、一部につき郵送料+カンバで切手100円分（なるべく50円切手をや送り下さい）同封の上お知せ下さい。お送り先は、下欄ワク内の連絡先でお願い致します。

編 集 後 記

忙しいから「できなかった」などというのは、およそ通らない理屈だと言う。自分もそう思う。それでも、忙しかったのだから仕方ない、としか言いようがない。またまた発行が遅れて申し訳ありません。でも、次号こそはとおりきってあります。

うとうしい梅雨時、登山グッズにカビなどはやさぬよう、十分お気を付け下さい。

尾瀬 第12号

昭和52年6月10日発行

発行者 尾瀬の自然を守る会 一年間会費 1,000円

連絡先 〒108 港区三田1-11-45-108 大田和方

☎(03)451-3883(郵便振替・東京6-138023)

編集 河内輝明

〒154 世田谷区下馬3-38-14

☎(03)422-3466